

Abstract

日本では近年、大学の英語教育のカリキュラムに通訳演習が導入されるようになってきた。しかし、受講する大学生は将来、必ずしも通訳になることを目指しているわけではない。また調査によれば、指導にあたる教員は、受講する学生の英語力が通訳をするのに十分でないと感じていることも多い。従って、従来のプロの養成を目的とした通訳シミュレーションを中心とする通訳訓練とは異なる視点に立った新たな訓練方法が必要であると考えられる。本研究は、大学生の英語から日本語への逐次通訳の問題点を探り、その解決策を考えるものである。そのために、実際に大学生の逐次通訳にはどのような問題点があり、それはどのような原因で起こるのか、大学生に日本語に訳してもらったインタビューとニュースの 2 種類の通訳をさまざまな角度から分析した。その結果、言葉の置き換えで済むような訳出の方が、意味をとって訳すものよりもよくできていた。またいずれの通訳でも一度に訳す 2 文、もしくは 3 文からなる通訳課題の終わりの方に行くほど、正しい訳出の割合が低くなる傾向があるという問題が判明した。その原因としては、最初の段階で処理に手間取り、遅れが生じてしまうためであると思われるが、この現象は実験参加者の実験後の聞き取り調査でも、「単語の認識がすぐにできない」「訳語がすぐに出てこない」「聞き逃した」という言葉で表現されていた。つまり最初の段階で、英語の音声認識に手間取る場合と、音声認識ができていても日本語の適訳を見つけるのに時間がかかる場合があると考えられる。訳出の具体例を示しながら、従来の通訳訓練の問題点を指摘し、解決策を提示したい。